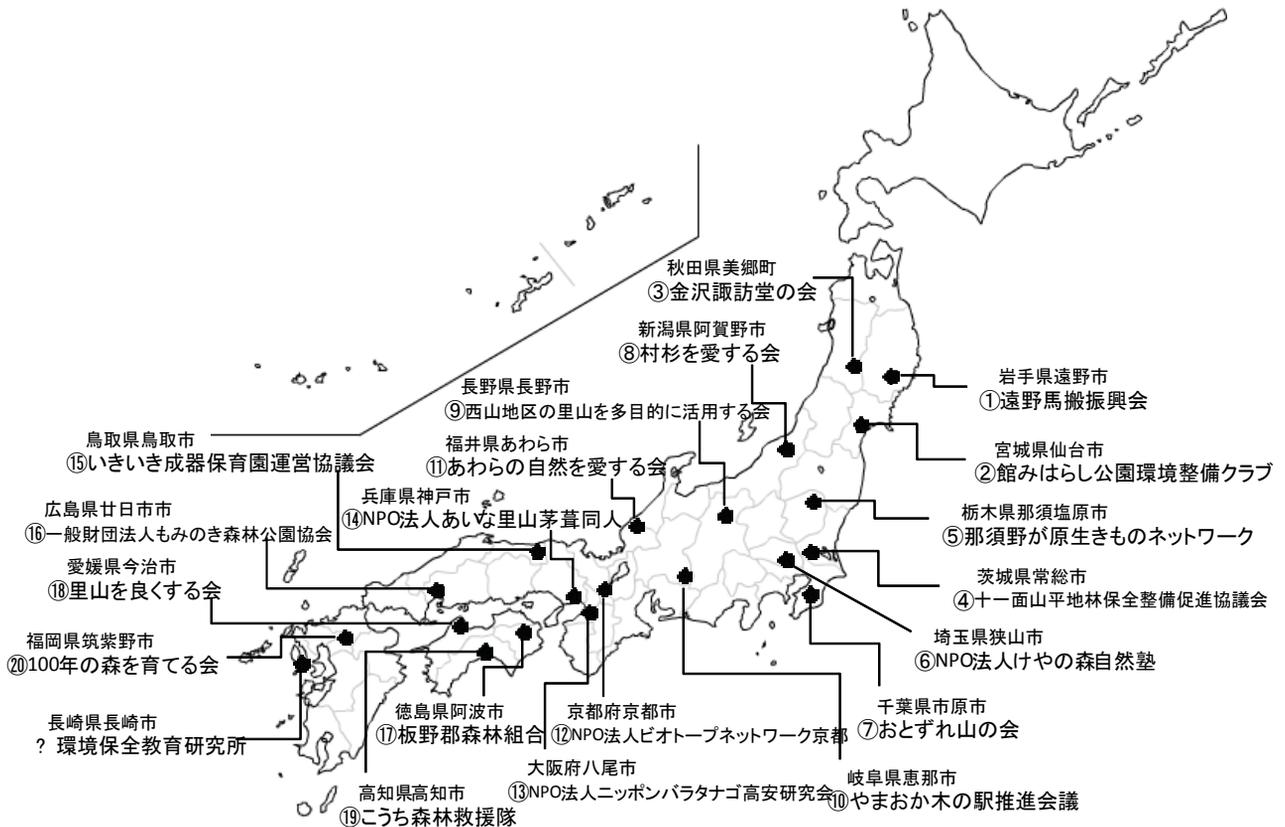


活動事例集

| 活動組織名 | 活動年度 | 活動タイプ | | | |
|-------------------------------|--------|-------|----|----|----|
| | | 里山 | 竹林 | 資源 | 空間 |
| ① 遠野馬搬振興会(岩手県遠野市) | 25, 26 | | | ○ | ○ |
| ② 館みはらし公園環境整備クラブ(宮城県仙台市) | 25, 26 | ○ | ○ | | ○ |
| ③ 金沢諏訪堂の会(秋田県美郷町) | 25, 26 | ○ | | ○ | |
| ④ 十一面山平地林保全整備促進協議会(茨城県常総市) | 25, 26 | ○ | | | ○ |
| ⑤ 那須野が原生きものネットワーク(栃木県那須塩原市) | 25, 26 | ○ | ○ | | ○ |
| ⑥ NPO法人けやの森自然塾(埼玉県狭山市) | 26 | ○ | | | ○ |
| ⑦ おとずれ山の会(千葉県市原市) | 25, 26 | ○ | ○ | | ○ |
| ⑧ 村杉を愛する会(新潟県阿賀野市) | 25, 26 | ○ | ○ | | ○ |
| ⑨ 西山地区の里山を多目的に活用する会(長野県長野市) | 25, 26 | ○ | ○ | ○ | ○ |
| ⑩ やまおか木の駅推進会議(岐阜県恵那市) | 25, 26 | ○ | ○ | ○ | ○ |
| ⑪ あわらの自然を愛する会(福井県あわら市) | 25, 26 | ○ | | | ○ |
| ⑫ NPO法人ピオトーブネットワーク京都(京都府京都市) | 25, 26 | ○ | | ○ | ○ |
| ⑬ NPO法人ニッポンバラタナゴ高安研究会(大阪府八尾市) | 25, 26 | ○ | | ○ | ○ |
| ⑭ NPO法人あいな里山茅葺同人(兵庫県神戸市) | 25, 26 | ○ | | | ○ |
| ⑮ いきいき成器保育園運営協議会(鳥取県鳥取市) | 25, 26 | | | | ○ |
| ⑯ 一般財団法人もみのき森林公園協会(広島県廿日市市) | 25, 26 | ○ | | ○ | ○ |
| ⑰ 板野郡森林組合(徳島県阿波市) | 25, 26 | | | | ○ |
| ⑱ 里山を良くする会(愛媛県今治市) | 25, 26 | | ○ | | |
| ⑲ こうち森林救援隊(高知県高知市) | 25, 26 | ○ | ○ | ○ | |
| ⑳ 100年の森を育てる会(福岡県筑紫野市) | 25, 26 | ○ | ○ | ○ | ○ |
| ㉑ 環境保全教育研究所(長崎県長崎市) | 25, 26 | | ○ | ○ | ○ |



① 地域の伝統「馬搬技術」の伝承と馬を活用した地域づくり

団体名：遠野馬搬振興会(岩手県遠野市)

| | |
|---|-------------------------|
| | 地域環境保全タイプ (里山林保全) |
| | 地域環境保全タイプ (侵入竹・竹林整備) |
| ○ | 森林資源利用タイプ |
| ○ | 森林空間利用タイプ |



活動に取り組んだ経緯

馬搬技術の伝承と、地域の里山の再生

- 「馬搬」とは、遠野市では古くから林業の現場で行われている、馬を活用して木材を運び出す技術。馬を活用することで大型機械が入れない山でも入ることができ、山を傷めることなく作業できることから、環境に優しい搬出方法。
- 岩手県遠野市では昭和の中頃まで多くの林業関係者が馬搬によって木材の搬出作業を行っていた。しかし、林業の機械化や馬搬従事者の高齢化などによって、その数は現在では数名となっており、技術の伝承が難しい状況となっていた。そこで、平成22年に行政や馬搬の関係者などにより「遠野馬搬振興会」が設立され、馬搬技術の伝承・宣伝・普及活動を行っている。
- これまで、馬搬の作業現場は市が所有する森林が中心であったが、交付金の活用によって、荒廃が進んでいた地域の里山で間伐と馬搬による搬出作業を開始し、馬を活用した地域づくりに取り組み始めた。将来的には、地域住民を巻き込みながら、「馬と共に暮らす持続可能な里山づくり」を目指している。



▲間伐材を馬搬によって搬出



▲杉林の間伐と造材作業

活動の内容

里山の間伐と馬搬による搬出作業（森林資源利用タイプ）

- 同振興会は、遠野市の西側に位置する綾織（あやおり）地区の山谷川（やまやがわ）上流域の里山を本交付金を活用した馬搬作業のフィールドとしている。
- 雑木林の刈り払いや杉林の間伐を行い、木材は馬搬によって搬出する。
- 搬出した木材の利用価値を高めながら余りなく有効活用できる方法の検討を進めている。

馬搬ワークショップの実施（森林空間利用タイプ）

- 馬搬技術の普及・啓蒙活動として、ワークショップを開催し、馬搬デモンストレーションや勉強会を実施している。環境に優しい古くからの伝統技術への関心は高く、全国や海外からも参加者が訪れている。



▲馬搬デモンストレーションの実施

活動の成果・効果

馬搬技術の啓蒙活動の促進

- これまで同振興会の活動フィールドは市の所有林が中心であり活動には制限もあった。本交付金の活用によって民有林にも活動できるフィールドを得たことで、馬搬技術の習得や宣伝の機会を増やすことができた。
- 馬を活用しながら地域全体の活性化を図る計画を進めており、交付金によって活動が促進された。

集落への移住効果

- 同振興会による馬搬の啓蒙活動の成果により、馬搬技術や馬と人がともに暮らす生活への関心は高まっており、その魅力に取りつかれ、Iターンを決意した若者も出てきている。今後、さらに馬を活用した環境負荷の少ない暮らし方への関心を高め、地域全体の活性化につなげられるよう、活動を進める。

| 活動タイプ | 延べ参加人数 | 活動回数 | 活動面積 |
|------------------------------|-------------------------------|------------------------------|----------------------------------|
| 【森林資源利用】 間伐と馬搬による 搬出作業 | (H25) 164人 (H26) 実施中 | (H25) 58回 (H26) 実施中 | (H25) 9.1ha (H26) 9.1ha |
| 【森林空間利用】 ワークショップ等 | (H25) 110人 (H26) 実施中 | (H25) 9回 (H26) 実施中 | — |



▲馬搬への関心は高い(ワークショップの様子)

工夫した点・苦労した点・今後の課題

課題となる人材育成と間伐材の有効利用

- 交付金の活用で馬搬の周知が促進され、関心をさらに高めることができたが、今後は馬搬技術の継承者の育成が課題となる。現在では燃料資源としての木材の利用は低下しているため、かつてのように馬搬のみで生計を立てることが難しい現状がある。そのため、関心が高まってはいるものの、馬搬技術の継承者はまだ少ない。
- 同振興会では馬搬技術の継承を促進させるために、大手家具メーカーと連携し、馬搬された木材での家具の生産を行うなど、馬搬の付加価値を高め、これを活用したビジネスモデルを作り上げようと検討を進めている。

地域が一体となった取り組みを目指す

- 馬は馬搬だけでなく、田畑の耕作や馬糞を堆肥として利用するなど、農業においてもつながりが深い。また、馬と触れ合うことでセラピー効果も注目されており、交付金の活動とは別に、これらを地域活性化に活かしていこうと計画を進めている。このような計画を推進していくことが将来の活動資金の確保につながるものと考えている。



▲馬搬技術の指導中

<総括> 成功を生んだポイント

馬搬の伝承に留まらず、馬を活用した地域づくりへと発展

- これまでは主に馬搬技術の伝承に取り組んできたが、本交付金を活用したワークショップ開催や間伐材の新たな利活用法の検討等によって活動の枠が広がり、馬と人がともに暮らす地域づくりを行い、地域活性化を図ろうとする取り組みが動き出している。

若い世代による積極的な宣伝活動により、馬搬の周知が進む

- 林業の従事者の高齢化が進む中で、同振興会の活動は、主に30代が中心となって活動に取り組んでいる。これらの若い世代が精力的に馬搬の宣伝を行っており、メディアに取り上げられる機会も多く、馬搬に対する注目度は高まっている。

② 緑豊かな住宅街の新たな魅力発見

団体名：館みはらし公園環境整備クラブ(宮城県仙台市)

| | |
|---|-------------------------|
| ○ | 地域環境保全タイプ (里山林保全) |
| ○ | 地域環境保全タイプ (侵入竹・竹林整備) |
| | 森林資源利用タイプ |
| ○ | 森林空間利用タイプ |



活動に取り組んだ経緯

住宅街周辺の荒廃した森林を整備し、居住環境の改善を図る

- ・仙台市中心街から北西約10kmに位置する泉区館(やかた)4丁目西は、10年ほど前に山林を団地造成して開発された310世帯、約1,100人が暮らす緑豊かで閑静な住宅街。
- ・4丁目西周辺には約3.8haの森林が広がっているが、整備が行われておらず荒廃が進んでいたことから、住宅街の近隣にも関わらず、カモシカやイノシシ、サルなどの野生動物が出没し、住民へ危害を及ぼしかねない状況にあった。このような状況や景観上の観点から、4丁目西町内会や管理組合の役員を中心に周辺森林の整備の検討を始めたところ、本交付金の制度を知ることとなり、平成25年に町内の役員ほか32名で館みはらし公園環境整備クラブを結成し、活動を開始した。



▲作業場所の確認

活動の内容

森林内の間伐や竹林の伐採、下草刈りによって遊歩道を整備(地域環境保全タイプ)

- ・森林の間伐や下草刈り、侵入竹林の伐採を行っている。整備を進める森林は広範囲に渡り傾斜も厳しいため、作業の一部は林業技術を有しているシルバー人材センターへ委託している。
- ・現在は本交付金を活用して整備を進めているが、手を入れるのを止めてしまえば数年後には荒廃した森林へと再び戻ってしまう。そのため、森林内に遊歩道を整備し、身近にある豊かな森林資源の活用を進め、交付金事業の終了以降も、地域住民によって継続した維持管理が行える環境作りを目指している。

遊歩道を活かした自然体験活動の実施を検討(森林空間利用タイプ)

- ・現在は遊歩道の整備を進めている段階であるが、今後はこの遊歩道を活用して、バードウォッチングや自然観察会の実施などを考えている。また、森林資源の維持管理を継続していくためには若い世代の関心を高めることが必要と考え、地域に居住する子どもたちが自然を満喫して遊べるような仕掛けづくりを予定している。



▲下草刈りを行い、遊歩道を整備

活動の成果・効果

地域の新たな魅力を発見

- ・森林の整備を進めていく中で、素晴らしい森林資源が地域内にあることが分かった。遊歩道を整備することで、住宅街に居住する住民が、自宅のすぐ目の前で自然に親しむことができ、生活環境の向上につながった。交付金によって開始した活動が、地域の新たな魅力を発見するきっかけとなった。

活動によって達成感や生きがいを感じることができた

- ・同クラブには若いメンバー（30代～）も所属しているが、現在は荒れ果てた森林の整備を進めている段階であり、危険も伴うことから、作業経験のある60代以上のメンバーを中心に活動を行っている。森林整備は体力的にも楽な作業ではないが、作業が進めば進むほど成果が表れ達成感につながっている。また、遊歩道が形になってくると、これを活かしたさまざまなアイデアを考える楽しみが増え、メンバーの生きがいとなり、活動への意欲は衰えない。

| 活動タイプ | 延べ参加人数 | 活動回数 | 活動面積 |
|--------------------|--------------|--------------|----------------|
| 【里山林保全】 森林整備 | (H25) 53人 | (H25) 12回 | (H25) 3.0ha |
| | (H26) 実施中 | (H26) 実施中 | (H26) 3.8ha |
| | (H25) 10人 | (H25) 6回 | (H25) 0.1ha |
| 【侵入竹・竹林整備】 竹林整備 | (H26) 実施中 | (H26) 実施中 | (H26) 0.1ha |



▲下草刈りの様子

工夫した点・苦労した点・今後の課題

交付金の終了後も遊歩道の維持管理を継続していくことが課題

- ・地域の魅力的な森林資源を継続して維持・管理していくために、次世代へどのように引き継ぎを行うかが課題となっている。
- ・広報誌を毎月作成して町内で回覧するなど、協力者を増やすために、活動の周知に努めている。
- ・同クラブのメンバーは継続した維持・管理を行うために、地域の自然に対する若い世代の関心を高めていく仕掛けが必要だと考えている。子どもたちが安全に楽しめる環境を作ることで、若い世代の関心を高めようと森林内の整備を進めているが、今後は身近な森林の活用方法について検討をさらに進めることが課題となる。



▲遊歩道を整備し、森林資源の有効活用を進める

<総括>成功を生んだポイント

交付金をきっかけに地域の住民が森林に向き合う

- ・生活環境の向上のために森林整備の必要性について検討を進めていたところ、本交付金制度が後押しとなり、検討内容を実行に移すきっかけとなった。今後は、交付金の終了後も森林整備に継続的に取り組めるよう、子どもや若い世代の関心を高めるための活動に力を入れていく。

外部委託の有効活用などにより無理のない活動を進める

- ・作業の外部委託や参加者への日当が交付金の対象になることは、同クラブが活動を開始するうえで大きなポイントとなった。
- ・現在の活動は60代以上の住民が中心となって進めているため、広範囲の森林整備を行うためには、林業技術を有する業者への外部委託が不可欠であった。本交付金は作業の外部委託が可能な仕組みであることから、無理なく活動に参加できるため、活動のモチベーションを維持することができた。
- ・活動の参加者へ日当を支給できることで、活動への参加の呼びかけを積極的に行うことができた。

③ 地域の歴史・文化を活かし里山再生に取り組む

団体名：金沢諏訪堂の会(秋田県美郷町)

| | |
|---|-------------------------|
| ○ | 地域環境保全タイプ (里山林保全) |
| | 地域環境保全タイプ (侵入竹・竹林整備) |
| ○ | 森林資源利用タイプ |
| | 森林空間利用タイプ |



活動に取り組んだ経緯

地域の里山再生を目指す

- ・美郷町金沢(かねざわ)地区は、平安時代に栄えた清原一族縁の地であり、周辺の里山には歴史に関わる史跡が残っているなど、歴史と里山との関わりは深い。この里山は、以前は手入れが行き届いた多様性豊かな森林だったが、現在ではかつて利用されていた山道が分からないほど荒廃が進んでいた。
- ・「金沢諏訪堂の会」は、このような状況を憂慮し、地域の里山を再生させようと平成23年に設立され、近隣地域の住民18名で活動を始めた。
- ・森林の整備とともに、荒れ果てた山道を整備し、その後、森林資源の有効活用を進めることにより、里山の再生を目指す。
- ・同会は地域住民の関心を高め、賛同者の増加につなげるために、里山の整備と併せ、地域の歴史を振り返る取り組みを一体として活動を展開している。



▲倒木を分割して運び出す

活動の内容

間伐や下草刈りによる山道の整備(地域環境保全タイプ)

- ・美郷町金沢地区には地域の森林組合や農業協同組合など、4つの組合が共同で所有する約160haの共有林が広がっている。この共有林は長い間全く手入れが行われておらず放置されていたため、昔は利用されていた山道が、倒木や下草等でその存在が分からないほど荒れ果てていた。全長約6kmに渡る山道を間伐や下草刈り等を行い整備することで、遊歩道として散策を楽しめるように修繕を行うとともに、かつての里山を再生し、山林の多面的な機能を蘇らせようと活動している。

森林資源を有効活用し、持続可能な森林に導く (森林資源利用タイプ)

- ・現在は里山の整備、山道の修繕を行っている段階であるが、今後は間伐した木材等の森林資源を有効活用し、継続的に里山林の景観と生体を保全していくことを考えながら活動している。
- ・将来的には対象森林を教育の場として利用することや、森林資源をバイオマスエネルギーとして活用していくことを検討している。



▲山道の整備。道なき道を進む

活動の成果・効果

秋田県御岳山につながる全長6kmの山道の完成

- ・山道の整備は、地図やGPSを利用してかつての山道の位置を確認し、作業を進めた。
- ・作業範囲は全長6kmに渡り、全て同会で位置の計測から山道の整備まで行った。荒れ果てた林内の整備には時間も労力も大変だったが、平成24年から数年かけて、近隣の山頂に続く山道を通すことができた（平成24年は交付金の活動とは別に実施）。
- ・さらに整備を進めることで、来年には登山道として開通式を行う予定だ。

絶滅の危険があるクロサンショウウオの発見

- ・環境省では絶滅の恐れのある野生生物をまとめたレッドリストを公表しているが、その中でクロサンショウウオは、「将来的に絶滅する危険性がある（準絶滅危惧）」とされている。
- ・山道の整備を進める途中の沢で、同会がクロサンショウウオの卵を発見した。発見後は環境省や県環境部へ連絡を行うとともに、生息地を保全していく考え。

| 活動タイプ | 延べ参加人数 | 活動回数 | 活動面積 |
|-------------------|--------------|--------------|----------------|
| 【里山林保全】 林道の整備等 | (H25) 69人 | (H25) 16回 | (H25) 7.7ha |
| | (H26) | (H26) | (H26) |
| | 実施中 | 実施中 | 10.7ha |



▲発見されたクロサンショウウオの卵

工夫した点・苦労した点・今後の課題

苦労した山道の位置の特定や森林境界の計測

- ・対象領域の把握には森林簿や森林基本図、国土地理院の地図等を利用したほか、本交付金でGPSを購入して行った。対象領域を歩きながら緯度経度を測定し、山道の位置の特定や森林境界の計測を地道に行った。山道の全長は約6kmに及び、多くの時間と労力を費やした。



▲携帯GPS機器を使用して山道の位置の特定・森林境界の計測を実施

森林資源の有効活用を今後進めていく

- ・現在は山道を通す活動を中心に里山の整備を進めている段階であるが、今後は、森林資源を有効に活用し、持続可能な森林に導くことを考えている。特に木質バイオマスエネルギーのシステム構築について検討を進めている。

<総括> 成功を生んだポイント

2つの活動の柱が参加者の増加につながる

- ・美郷町金沢地区は、平安時代後期の「後三年の役※」で知られる清原一族と深い関わりがあり、交付金の活動とは別に、この歴史を振り返るシンポジウム等を同会が主催し行っている。地域の里山には清原一族と縁のある史跡がいくつかあるため、地域の歴史と里山の自然という、2つの地域の資源を柱とした活動を一体として行うことで、活動への関心が高まり、メンバーの増加につながっている。

活動内容とモチベーションの充実を交付金の活用によって図る

- ・平成23年に同会を立ち上げ、地道に森林整備活動を行ってきたが、平成25年度からは交付金を活用することで活動内容の充実が図られた。また、森林・山村多面的機能発揮対策の事業に採択されたということが参加者のモチベーションにもつながっている。

※「後三年の役」：1083～1087年。東北地方を支配していた清原一族の内紛に源義家が介入した戦乱。清原一族の養子となっていた清衡が義家と手を組み勝利し、藤原と姓を変えて奥州平泉を開いた。

④ 桜並木作りにより、地域に長く愛され続ける里山へ

団体名：十一面山平地林保全整備促進協議会(茨城県常総市)

| | |
|---|-------------------------|
| ○ | 地域環境保全タイプ (里山林保全) |
| | 地域環境保全タイプ (侵入竹・竹林整備) |
| | 森林資源利用タイプ |
| ○ | 森林空間利用タイプ |



活動に取り組んだ経緯

里山を復元し、貴重な自然を後世に残そうと立ち上がった住民組織

- ・茨城県常総市北部の鬼怒川沿いは、全国的にも珍しい河畔砂丘がある。この一帯は「十一面山(じゅういちめんやま)」と呼ばれる平地林で、かつては美しい赤松林が広がっていた。しかし高度経済成長期に建設用資材として砂丘の砂が乱採取され、また、木材価格の低迷により地域一体の森林は荒廃してしまう。さらに、不法投棄により大量のゴミが山積みされ、かつての美しい森林が、見る影も無くなってしまった。
- ・このような状況から、「貴重な里山の自然を取り戻し、後世に残そう」と、住民有志や地権者、ボランティアなど約100数名で、平成15年に「十一面山の自然を守り育む会」が結成された(平成19年に「十一面山平地林保全整備促進協議会」と名称を変更)。
- ・同協議会は、大量のゴミ処理や5,000本の植樹などにより森林を再生した後、子どもたちを招待して自然体験活動を実施するなど、約10年に渡って活動を継続している。



▲住民参加による不法投棄のゴミ処理

活動の内容

約200本の桜の植樹による桜並木作り(地域環境保全タイプ)

- ・これまで植樹等で森林の再生に取り組んできたが、さらに地域の自然に愛着と親しみを深められるよう、本交付金の活用によって鬼怒川沿いの河畔林を遊歩道として整備し、桜並木とする取り組みを始めた。平成25年からの2年間で約200本の桜を植樹した。

自然体験活動の実施(森林空間利用タイプ)

- ・地域の里山で自然に親しみ、ふるさとに愛着を深めてもらいたいと、親子を対象とした自然体験活動(「十一面山自然探検隊」)を9年連続で実施している。平成25年度には本交付金を活用した植物観察や野鳥観察のほか、森林資源を活用したレクリエーションを行っており、毎年度、地域の多数の親子が参加する恒例の行事となっている。



▲神代曙(桜)を植樹

活動の成果・効果

数年後に期待される満開の桜並木

- ・山積みにされたゴミの片付け、植樹やその後の管理を多くの地域住民が参加して行ってきたことにより、地域住民が自ら地域の自然を大切にしようとする気持ちが強くなった。
- ・対象森林がこれまで以上に地域に大切にされ、愛され続けるよう、桜並木を作る計画を推進しているところである。

自然体験活動実施負担の軽減

- ・自然体験活動では、専門の講師を招いて植物観察や野鳥観察などを行うほか、子どもたちの参加を促すためにさまざまなレクリエーションを行っているが、参加費は全て無料としているため、運営費は同協議会の会費や協力者のご厚意に頼るところが大きかった。しかし、交付金を講師の謝金等に活用することによって費用負担が軽減され、さらに、協力者の増加などが図られた。

| 活動タイプ | 延べ参加人数 | 活動回数 | 活動面積 |
|---------------------------|-------------------------------|-----------------------------|----------------------------------|
| 【里山林保全】 森林整備と 桜の植樹 | (H25) 138人 (H26) 実施中 | (H25) 3回 (H26) 実施中 | (H25) 4.6ha (H26) 7.0ha |
| 【森林空間利用】 十一面山 自然探検隊 | (H25) 53人※ | (H25) 1回 | — |

※活動組織のメンバーのみ



▲自然体験活動には多くの親子が参加し楽しんでいる

工夫した点・苦労した点・今後の課題

桜並木作りへの協力を国交省へ依頼

- ・桜並木を作ろうと計画していた鬼怒川沿いの河畔林は草などで覆われていたため整備する必要があったが、一部を国交省が管理していたため手を付けることができなかった。国交省の管轄である河川事務所へ桜並木作りについて協力を依頼したところ、林内に遊歩道を整備する協力が得られ、桜並木作りの計画を実行に移すことができた。



▲鬼怒川沿いの整備が進む

自然体験活動への参加を促すための仕掛け

- ・同協議会は、地域の森林資源を守っていくために、子どもたちから地域の自然に親しみ愛着を深められるよう、自然体験活動を実施している。毎年、親も含め大変多くの地域住民が参加し、人気がとても高い。植物観察や野鳥観察のほかにも、交付金の活動とは別にさまざまなレクリエーションを無料で開催していることが、親子の参加を促している。子どもたちからは、「自然の中で思い切り楽しめたことが嬉しかった」という感想も多く、心にしっかりと自然への愛着心が芽生えている。今後も継続して活動を続け、森林の持つ多面的機能や森林の大切さを教えていくことが課題。



▲親子で栗拾い

<総括> 成功を生んだポイント

安全面や協力者の負担軽減に配慮し、地域が一体となった活動を行う

- ・同協議会では、不法投棄されたゴミの処理から植樹、その後の整備、維持管理と、地域の自然を取り戻すためにさまざまな活動を継続してきた。こうした活動に交付金を活用できることが重要なポイントとなり、遊歩道整備や自然観察会など活動の充実を図ることができた。
- ・これまでの活動では会員や協力者のボランティア精神によって成り立っていた部分が大きかったが、日当の支給によって活動参加の声掛けもしやすくなり、参加者の増加につながっている。また、10年前に植樹した樹木が成長しており、今後は間伐作業が必要となるが、チェーンソー等の機材の使用は危険が伴うため、業務の一部を外部に委託して安全に活動を進めた。

⑤ 森林資源の活用を進め、持続可能な地域社会の実現を目指す

団体名：那須野が原生きものネットワーク(栃木県那須塩原市)

| | |
|---|-------------------------|
| ○ | 地域環境保全タイプ (里山林保全) |
| ○ | 地域環境保全タイプ (侵入竹・竹林整備) |
| | 森林資源利用タイプ |
| ○ | 森林空間利用タイプ |



活動に取り組んだ経緯

森林資源を活用したビジネスモデルの構築を目指す

- ・那須野が原生きものネットワークは、自然環境の保全や自然資源の活用によって持続可能な地域社会の実現を目指し、平成20年より那須野が原地域の水辺・ビオトープの生態調査や里山の整備、間伐材を利用したペレットの販売等を行ってきた。
- ・平成25年からは、本交付金を活用して荒廃竹林の整備を始めたほか、親子を対象とした環境学習会の開催や地域の里山整備を行うなど活動の幅を広め、これらをベースとして利益の得られるシステム作りを模索している。



▲荒れ果てた竹林を整備し、竹材を得る

活動の内容

荒廃竹林の間伐を行い、チップ化して土壌改良材として利用 (地域環境保全タイプ：侵入竹・竹林整備)

- ・作物の栽培を行う畑のすぐ脇には、約1.5haの荒廃した竹林が茂っている。荒廃竹林の整備によって搬出した竹をチップ化し、土壌改良材として利用することで、竹林環境の改善を目指している。また、この取組は、環境負荷の少ない農業の実践にも役立っている。



▲竹材を木材チップパーでチップ化

里山の整備を地域の自治会と協力して行う (地域環境保全タイプ：里山林保全)

- ・地域の自治会が管理する里山の間伐や下草刈りを、自治会とともに行う。整備後に搬出された木材を、地域の中で有効利用できる方法を探り、森林資源の循環型システムの構築を目指している。また、本交付金を活用して構成員に対する機材使用の安全講習会を開催している。

親子を対象とした環境学習会の実施(森林空間利用タイプ)

- ・活動を行っている竹林や地域の里山をフィールドとし、親子を対象とした環境学習会を実施している。竹材のチップ化体験や間伐した木材を利用した工作などを行い、自然への関心を高め、理解を深める機会を提供している。



▲竹材のチップ化体験(環境学習会)

活動の成果・効果

交付金の活用で活動の幅が広がった

- ・本交付金の活用で、竹林整備や地域の里山整備を行い、さらにその活動の場を活かして環境学習会を実施するなど、活動の幅を広げることができた。
- ・環境学習会では子どもたちが自然の中で生き生きと楽しんでいる様子が見られる。自然を身近なものとして関心を高められるよう、今後さらに内容を充実させながら学習会を継続していきたい。

竹林や里山環境の改善と住民意識の向上

- ・荒廃の進んでいた竹林や里山が、整備を進めることで明らかに林内の環境が改善されていく様子がわかり、達成感や活動の意欲へとつながっている。
- ・里山の手入れを継続して行うためには、地域で生活する住民が自らの問題として捉え、率先して取り組もうとする姿勢が欠かせない。本交付金の活用によって始まった里山整備であるが、活動を進める中で住民の問題意識が高まり、積極的に活動に参加する人が増えつつある。

| 活動タイプ | 延べ参加人数 | 活動回数 | 活動面積 |
|--------------------|-------------------------------|------------------------------|----------------------------------|
| 【里山林保全】 里山整備 | (H25) 63人 (H26) 実施中 | (H25) 16回 (H26) 実施中 | (H25) 3.6ha (H26) 3.6ha |
| 【侵入竹・竹林整備】 竹林整備 | (H25) 57人 (H26) 実施中 | (H25) 23回 (H26) 実施中 | (H25) 1.5ha (H26) 1.5ha |
| 【森林空間利用】 環境学習会 | (H25) 30人※ (H26) 実施中 | (H25) 3回 (H26) 実施中 | — |

※活動組織メンバーのみ

工夫した点・苦労した点・今後の課題

竹チップの活用を広め、竹林整備の促進を望む

- ・チップ化した竹材が土壌改良材として利用できることはあまり知られていない。同ネットワークは、荒廃竹林を整備するきっかけを作るために、竹チップの有効活用について、今後さらに周知を進めていく。

森林資源を活用したビジネスモデルの構築が求められる

- ・同ネットワークでは、竹林や里山の手入れが持続的に行われるためには、交付金が終了しても森林資源が利益に結びつく仕組みの構築が必要と考えている。そのため、チップ化した竹やペレットの販売等を行い、収益事業としての可能性を模索している。今後は、ビジネスモデルの構築を目指し、協力者を増やしながら活動を広めていくことが課題となる。



▲チップ化した竹を畑に散布

<総括> 成功を生んだポイント

土壌改良材として有効性の高い竹チップ

- ・竹チップは分解がとても速く、土壌微生物の活性化を促す効果があるため、無施肥・無農薬栽培に適している。また、使用方法は簡単で、そのまま畑に撒くだけでよい。このように、環境負荷の少ない農業を簡単に行えることがメリットとなり、竹材の取得のために竹林の整備を始めるきっかけとなった。

人と人とのつながりが活動を支援

- ・那須野が原生きものネットワークが中心となってさまざまな活動を展開しているが、今回、交付金の活用によって竹林・里山整備、環境学習会の実施など、さらに活動の幅を広めている。そこには同ネットワークの取り組みに共感する人々のつながりが欠かせず、畑や里山など活動フィールドの提供や、イベントの手伝いなど、人と人とのつながりが活動を支えている。

⑥ 里山機能復元と林あそびにより子どもの感性と生きる力を育む

団体名：NPO法人けやの森自然塾(埼玉県狭山市)

| | |
|---|-------------------------|
| ○ | 地域環境保全タイプ (里山林保全) |
| | 地域環境保全タイプ (侵入竹・竹林整備) |
| | 森林資源利用タイプ |
| ○ | 森林空間利用タイプ |



活動に取り組んだ経緯

里山機能復元と自然体験により子どもの感性と生きる力を育む

- ・武蔵野台地の丘陵上にある中沢の雑木林の周辺には、かつては縦横に小川が流れ、溪畔林の景観を維持してきたが、薪や炭を使わない生活になった頃から、明るい林はうっそうと茂った森へと荒廃していった。
- ・そのため、子どもを対象に自然体験を通じた学習と交流に取り組むNPO法人けやの森自然塾と地域住民が協力し、中沢の林をかつての里山に復元し、将来を担う子どもたちを対象とした森林体験教室を行い、幼児期からの環境教育の場としてより一層の活用を図っている。



▲下草刈り前の林の様子

活動の内容修正

里山の機能復元(地域環境保全タイプ)

- ・かつての里山に復元するために、植林された杉・桧を間伐、除伐しながら、下草刈りを行い、地内で発芽したコナラ、エゴ、クリなどを植林した。また近隣から採取したクヌギやカエデを植林した。あわせて地内のぬかるみやすい道を整備した。

近隣の幼稚園、保育園を対象とした森林体験教室の実施、教職員向け研修会およびフランスのフレネ教育交流会の実施、生態系調査の実施(森林空間利用タイプ)

- ・春から秋にかけて、けやの森学園(幼稚園、保育園からなり、同塾の母体)および近隣の幼稚園、保育園を対象とした森林体験教室を3回実施した。
- ・整備した林を活用し、近隣の幼稚園、保育園に森林体験教室を広げるために、教職員向けの研修会を2回実施した。
- ・さらに、「自然体験」を大切に、子どもの感性と生きる力を育むことをめざすフランスのフレネ学校との教育交流会を実施した。
- ・地内整備にともなう生態系の変容を確認するための動植物の調査も行った。



▲里山整備に励む地域住民



▲森林体験教室での、いきもの探し

活動の成果・効果

新たな動植物の発見が相次ぐ

- ・本交付金の活用で、春から夏にかけて林の間伐、除伐、下草刈りが例年より多くでき、秋も良好な環境が維持できた。4年ぶりに行えた生態系調査からは、埼玉県の絶滅危惧種の「オオタカ」や準絶滅危惧種の「シュンラン」の生殖が確認されるなど、林に光が入るようになった効果により新たな動植物の発見が相次いだ。

16年振りの日仏教育交流会が整備した林で実現

- ・けやの森自然塾の母体であるけやの森学園は「自然体験を通して子どもの生きる力を育む」が理念。
- ・同園は同様の理念をもつフランスのフレネ学校と20年に及ぶ交流があるが、交付金と整備した林を活用して16年ぶりの日仏教育交流会を実施した。100名を超える幼稚園・保育園の教職員等が参加し、好評を博した。

| 活動タイプ | 延べ参加人数 | 活動回数 | 活動面積 |
|----------|--------------|-------------|----------------|
| 【里山林保全】 | (H26) 21人 | (H26) 7回 | (H26) 1.4ha |
| 【森林空間利用】 | (H26) | (H26) | — |
| ①園児林あそび | ①244人 | ①5回 | |
| ②教職員研修会 | ②26人 | ②2回 | |
| ③日仏教育交流会 | ③104人 | ③1回 | |
| ④生態系調査 | ④22人 | ④1回 | |



◀整備された林で実施された日仏教育交流会

工夫した点・苦労した点・今後の課題

仮設トイレや作業道具を購入し、作業環境を整備

- ・本交付金を活用して仮設トイレを購入。自然体験や里山整備などをする参加者のトイレを確保することで、参加しやすい環境を整えた。
- ・また、本交付金を活用して、刈払機、チェーンソーも購入でき、作業道具が整ったことで間伐、除伐、下草刈りの生産性が高まり、効率よく作業を行うことができた。

園児向け自然体験教育の全国への普及と後継者の育成が課題

- ・けやの森自然塾は1994年の設立以来、「自然体験を通して子どもの生きる力を育む」をモットーに、林キャンプ、入間川源流キャンプ、チャレンジカヌー、登山キャンプ、黒姫スノーキャンプなど子どもたちが自然体験ができるイベントを企画し提供している。森林空間利用タイプでは、近隣の幼稚園・保育園と連携して森林体験教室を実施し、森林を活用した環境教育に取り組んだ。こうした活動は地域のボランティアスタッフにより成り立っているが、スタッフの高齢化が進んでおり、後継者育成が喫緊の課題となっている。



▲自然体験を指導するボランティアスタッフ

<総括>成功を生んだポイント

けやの森自然塾の活動への高い評価と教育理念の賛同者が活動を支援

- ・けやの森自然塾や同塾の母体である「けやの森学園」が掲げる自然体験教育やフレネ教育の理念に賛同した狭山市及び近隣市の幼稚園・保育園の保護者や近隣住民が強力な支持者となって活動を支持している点が成功の秘訣である。
- ・同塾の取り組みは、「さいたま地球環境賞」を受賞(平成7年)。森林の維持・管理や自然体験教育で「第1回関東水と緑のネットワーク拠点100選」に選出(平成19年)されるなど、県内外から高い評価を得ていることも活動を後押ししている。

国や自治体からの助成金が活動の継続に寄与

- ・同塾は森林の整備以外のさまざまな活動について、国、埼玉県、狭山市などから助成金を得て、資金面の不足を補って活動してきていることも特徴である。今回の林野庁の交付金も里山環境の整備や子どもたちの自然体験教育の拡充に大きく寄与している。

⑦ 急がず、楽しみながら100年先を見据えて進める森づくり活動

団体名：おとずれ山の会(千葉県市原市)

| | |
|---|-------------------------|
| ○ | 地域環境保全タイプ (里山林保全) |
| ○ | 地域環境保全タイプ (侵入竹・竹林整備) |
| | 森林資源利用タイプ |
| ○ | 森林空間利用タイプ |



活動に取り組んだ経緯

「一つの山にじっくりと手を掛け、変えていきたい」との創設メンバーの思いをきっかけに発足したシニア世代中心の組織

- ・平成18年に、藪と竹で人が入ることのできない状態だった千葉県木更津市の音信山(おとずれやま)の一部をおとずれ山の会の創設メンバーが購入し、近隣の有志とともに整備・保全活動を開始。同会は、女性6名を含む15名の会員で発足し、下草刈払い・除伐を軸に月に2回の活動を行ってきた。
- ・平成24年には、市原市独自の助成制度に基づいて、既に管理していた森林に近接する約1haの市有林の整備も開始。拡大した活動フィールドで月2回の森林保全活動を行っている。現在の会員は18名。



▲整備活動前の里山林内

活動の内容

市原市との里山協定に基づき、刈払い、除間伐、竹林整備を行う(地域環境保全タイプ：侵入竹・竹林整備)

- ・市原市天羽田(あもうだ)地区には、竹林を含む広葉樹林の市有林が点在している。このうち竹林を含む2か所3.7haについて、市との里山協定に基づき、刈払い、病枯木の除伐等の保安全管理、侵入竹除去、竹林整備を行っている。また、構成員に対する機材使用の安全講習会を開催している。

下刈り、除間伐、倒木・落下枝の処理等により活用できる里山林を整備(地域環境保全タイプ：里山林保全)

- ・木更津市真里谷(まりやつ)地区の音信山の一角の私有林について、下刈り、除間伐、倒木・落下枝の処理、遊歩道整備等の保安全管理が進められている。これらの保安全管理により、メンバー以外も参加しやすい自然観察会等のイベントに活用できる里山に生まれ変わった。

一般市民も参加した観察体験会の実施(森林空間利用タイプ)

- ・環境整備した里山をフィールドとし、一般市民を対象にした「おとずれの森を巡る小さな旅」、「真里谷の森を巡る小さな旅」と題した森林環境教育活動を実施し、シイタケの駒打ち体験等、里山に親しむ機会を提供するなど、森林づくりを通じた楽しい活動を実践している。



▲風倒木の処理・運搬作業



▲会員の指導によるシイタケ駒打ち体験

活動の成果・効果

交付金の活用による里山整備の進展

- ・本交付金の活用で、刈払い、侵入竹除去、除間伐、風倒木の処理等の里山整備が進展し、会発足時の「さまざまな山で活動を行うよりも、じっくりとひとつの山に手をかけ、変えていきたい」という会員の思いの実現に向けた歩みが加速している。

資機材の充実により無理のない作業環境を実現

- ・会員の高齢化に伴い、里山整備に際して、用具・機材の運搬や間伐材の移動などの負荷が大きい課題があったが、本交付金により、林内運搬車、手元制御型刈払い機の購入等の資機材充実を図ることができた。また、安全技術講習会の開催等を通じて、安全で無理のない作業環境を実現できた。

熱心な会員による里山活用の取組拡大

- ・会員の家族を含む一般市民も参加した観察体験会の開催や、熱心な会員を講師としたシイタケ駒打ち体験など、里山活用の取組を拡大することができた。

| 活動タイプ | 延べ参加人数 | 活動回数 | 活動面積 |
|------------------------|------------------------------|-----------------------------|----------------|
| 【里山林保全(一部侵入竹・竹林整備を含む)】 | (H25) 143人 | (H25) 17回 | (H25) 3.0ha |
| | (H26) 実施中 | (H26) 実施中 | (H26) 3.7ha |
| 【森林空間利用】 | (H25) 32人 (H26) 実施中 | (H25) 1回 (H26) 実施中 | — |



▲安全利用講習会での講師による資機材使用の説明

工夫した点・苦労した点・今後の課題

自然と親しみ、楽しみながらの活動を継続

- ・森林づくりを通じて、自然に親しみ、楽しむことが、会発足以来の理念である。このため、急がず、楽しみながら100年、200年先を見据えた長期的視点で、里山整備に取り組んでいる。今後も、「楽しみながら作業する」の精神が生かされるよう、作業日程や作業メニューを工夫して、美しい自然環境を次世代に伝えていきたい。



▲観察体験会ための整備作業

森林整備と里山としての多面的活用を目指した活動の展開

- ・今後は、里山整備・保全活動を継続していくとともに、スギ等の針葉樹とコナラ、クヌギ等の広葉樹による複層林の整備にも力を入れていきたい。また、整備された里山を憩いの場、安全技術講習会、アスレチック等のフィールドとして多面的に活用するとともに、企業・団体との協働促進、地権者との連携による森林づくり活動を拡大していくことが課題である。



▲観察体験会での参加者誘導・案内

<総括> 成功を生んだポイント

円滑で迅速な里山活動協定締結による活動の促進

- ・対象森林は、市原市(市有林)、木更津市(私有林)であるが、土地所有者が一人であったため、里山活動協定の締結が円滑にできた。迅速な協定締結によって、土地所有者への活動内容及び効果の説明に時間をかけることなく、里山整備・保全に注力することができた。

無理ない計画立案、安全に配慮した作業推進、会員が連携して楽しむ仕掛けづくり

- ・季節・天候や会員の体調等を考慮した無理ない作業計画の立案、定期的な安全技術講習の実施、念入りな段取り確認等安全に配慮した作業の推進、さらには、木工・自然観察、シイタケ栽培などを計画的に開催し、楽しみながら活動する仕掛けをいくつも織り交ぜることによって、会員の連携や関係づくりが進み活動を促進することができた。

⑧ 周辺森林の整備を温泉街の観光振興に活かす

団体名：村杉を愛する会(新潟県阿賀野市)

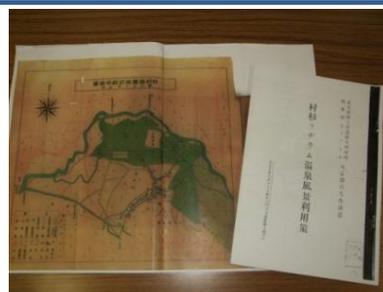
| | |
|---|-------------------------|
| ○ | 地域環境保全タイプ (里山林保全) |
| ○ | 地域環境保全タイプ (侵入竹・竹林整備) |
| | 森林資源利用タイプ |
| ○ | 森林空間利用タイプ |



活動に取り組んだ経緯

温泉街の観光振興と、安全安心な地域環境の保全に取り組む

- ・新潟県阿賀野市の村杉温泉は、五頭山（ごずさん）の麓に広がり、700年近い歴史をもつ緑豊かで情緒あふれる温泉街である。日本を代表するラジウム温泉として知られている。
- ・温泉街周辺の森林の多くは民有林で、所有者の高齢化等で手入れが行われておらず、近年、竹林の侵入等で荒廃が進んでいた。
- ・「村杉を愛する会」は、荒廃した森林を整備することで村杉温泉の活性化や地域環境の保全を図ることを目的とし、温泉組合や地区の自治会が一体となって総勢約60名で平成24年に結成された。
- ・同会は、県の地域振興戦略事業で行うワークショップに参加し、地域の森林資源を活かした観光振興の検討を進めていた。村杉温泉には、日本の「公園の父」と言われる本多静六氏によって大正10年に作成された、「村杉ラジウム温泉風景利用策」という観光振興策があり、これを参考にしながら周辺森林の整備や遊歩道の整備等の活動を行っている。
- ・平成25年度からは交付金の活用によってさらにこれらの活動が促進され、観光振興や安全安心な地域環境の保全に地域住民が一体となって取り組んでいる。



▲「村杉ラジウム温泉風景利用策」



▲整備した遊歩道

活動の内容

侵入竹林の伐採や、間伐、下草刈りによる遊歩道の整備 (地域環境保全タイプ)

- ・温泉街周辺には約4haの森林が広がっている。この森林は竹藪や雑木林となっており、歩ける道も無いような状態だったが、県の事業で平成24年度に遊歩道を作設し、平成25年度からは本交付金を活用しながら、さらに活動を促進させている。
- ・交付金の活動以外にも、遊歩道に手作りのベンチや柵、水飲み場を設置するほか、各所に同会が考案した観光スポットを設けるなど、散策を楽しみ、観光振興につなげるための仕掛けづくりを進めている。
- ・遊歩道を整備した後は、維持管理を継続して行い、森林内を散策して楽しめるイベント等の実施を検討している。



▲竹林の伐採の様子

活動の成果・効果

温泉街の観光振興につながる

- 遊歩道の整備によって、村杉温泉の観光振興に効果が出始めている。村杉温泉を訪れる観光客が、遊歩道散策を楽しみながら、温泉街全体を歩いて回るようになった。その結果、お土産の販売店や飲食店に立ち寄る観光客が増加し、売上が伸びるなど、温泉街全体の観光振興につながっている。また、リピーター客からも大変好評を得ている。

| 活動タイプ | 延べ参加人数 | 活動回数 | 活動面積 |
|--------------------|-------------------------------|-----------------------------|----------------------------------|
| 【里山林保全】 森林整備 | (H26) 65人※ | (H26) 4回※ | (H26) 2.1ha |
| 【侵入竹・竹林整備】 竹林整備 | (H25) 88人 (H26) 46人※ | (H25) 6回 (H26) 4回※ | (H25) 1.3ha (H26) 1.9ha |

※平成26年度は実施中につき10月末時点の数値

地域住民の結束力がさらに深まる

- 同会の特徴は、地区に居住する約7割の世帯から協力者を得ていることだ。遊歩道の整備には30代から高齢の方まで幅広い年代の方が参加しており、共に活動を行う中で、住民同士の絆や結束力がさらに深まった。

工夫した点・苦労した点・今後の課題

幅広い年代の参加

- 作業現場は斜面が多く、高齢の参加者には体力的に厳しい作業現場となった。しかし、若い世代の住人も積極的に活動に参加しており、幅広い年代の方がともに作業に取り組むことで、広大な範囲を同会の力で全て整備することができた。

温泉と遊歩道を活かした観光振興をさらに進める

- 遊歩道活用のさまざまなアイデアが生まれている。整備した遊歩道は「ねがいの小路」と名付け、散策マップを作成し、観光客へ周知を図っている。今後は、距離や難易度別に温泉街を巡り歩くコースを作成し、温泉と遊歩道を活かした観光振興をさらに進めていく。

周辺地域の温泉と連携した取り組みへの発展を目指す

- 村杉温泉は、今板温泉、出湯温泉とともに、五頭温泉郷に属する温泉のひとつである。五頭温泉郷は森林資源が豊富なことから、今後は周辺地域の温泉と連携を図りながら森林資源を活かした地域振興を進め、五頭温泉郷全体の活性化につなげていきたいと考えており、本交付金終了後も活動を継続していきたい。



▲体力的に厳しい急斜面での作業



▲共に活動する中で、地域の団結力が高まった

<総括> 成功を生んだポイント

行政（阿賀野市）のサポートが活動の促進に貢献

- 本交付金を活用するためには、住民組織には負担の大きい資料作成が必要になる。阿賀野市では、このような負担を和らげ住民組織が活動に専念できるように、交付金の申請に必要な事業計画書作成のアドバイスを行ったり、活動と一緒に参加するなど、同会との連携を密に図って活動を後押ししている。なお、このような仕組みにより阿賀野市では5組の活動組織が事業を行っている。

地域住民が一体となった取り組み

- 村杉地区では古くから温泉組合と自治会の連携が図られており、それぞれの立場に関わらず、皆で協力して地域を良くしようという一体感を生み出す素地が備わっている。同会の活動へは村杉地区に居住する世帯のうち、7割近い世帯から協力者を得ている。この地域住民の一体感が活動を後押し、温泉街の観光振興に大きな役割を果たしている。

⑨ 竹林整備により発生した竹チップの有効利用を進め、地域を活性化

団体名：西山地区の里山を多目的に活用する会(長野県長野市)

| | |
|---|-------------------------|
| ○ | 地域環境保全タイプ (里山林保全) |
| ○ | 地域環境保全タイプ (侵入竹・竹林整備) |
| ○ | 森林資源利用タイプ |
| ○ | 森林空間利用タイプ |



活動に取り組んだ経緯

竹林整備と淡竹の特産化を起点に地域を元気にしたい、との思いから地域の有志が多面的な活動を展開する組織を設立

- ・西山地区と呼ばれる長野市信州新町、中条、大岡の各地区と小川村のエリアでは、近年の過疎化や高齢化等の影響もあり、多くの竹林が放置され、里山の景観が損なわれるなど、地域の活力が低下していた。
- ・この状況に危機感を持った地域住民が中心となり、特産の淡竹(はちく)を加工してタケノコの水煮を商品化するなど多面的な活動により地域を活性化するための「西山淡竹会(にしやまはちくかい)」を平成22年4月に設立。地域の竹林整備を進め、西山地区の里山を多目的に活用する会の母体となった。



▲整備活動中の竹林内

活動の内容

竹藪化した侵入竹の除去やチップ処理により、活動可能な環境に転換(地域環境保全タイプ：侵入竹・竹林整備を含む)

- ・刈払機により下草刈りを行った後、チェーンソーにより侵入竹等を除去した。これによって、良好な環境の竹林が整備された。
- ・除去した竹を、竹チップ搬出機により運び出した後、竹粉碎機(チップパー)により粉碎し、運搬しやすいように袋詰め処理している。
- ・竹林の作業道や里山道に竹チップを敷き詰め、作業環境の改善を図るなど、竹チップの有効利用を図っている。



▲チップパー処理による袋詰め作業

整備で発生した竹チップで堆肥を生産(森林資源利用タイプ)

- ・長野市や市内の環境関連NPO法人と連携し、竹林整備で発生した竹チップを自然発酵させて、堆肥化したうえで販売している(交付金外の活動)。竹チップは農業用堆肥として活用されているほか、家庭用生ごみ堆肥化を促進する資材としての活用範囲の拡大を図っている。

市民参加行事によりエリア再生を目指す(森林空間利用タイプ)

- ・環境整備した竹林を活用し、一般市民の参加を募って、タケノコの収穫や加工を体験させるイベントを実施している。これらを契機に地域への関心を高めてもらうことで、西山地区の再生を目指している。



▲会員の指導によるタケノコの収穫体験

活動の成果・効果

竹林整備の担い手が増加し、活動面積も拡大

・従来からの活動が地域に浸透した結果、竹林所有者からの整備依頼が増加し、対応できるボランティアが不足気味であった。しかし、交付金の活用でボランティアも増え、侵入竹除去、チップ処理等の竹林整備や除間伐、風倒木の処理等の里山整備が進展し、活動面積も拡大した。これによって、会の活動について、地域内での認知度が高まった。

資機材充実のより効率的な作業環境が実現

・担い手の増加に伴い、竹林整備に際して、用具・機材の運搬や伐採竹の移動などの負荷が大きい課題があったが、本交付金により、竹チップ搬出機、刈払機、チェーンソー等の購入により、作業環境が改善した。また、初心者への技術講習の受講等を通じて、安全で無理ない作業環境を実現できた。

収穫体験により活動に対する住民の認知度が拡大

・タケノコの収穫体験等の森林空間利用タイプのイベントに地域住民が参加し、会の活動に対する認知度が高まった。

| 活動タイプ | 延べ参加人数 | 活動回数 | 活動面積 |
|------------|-----------------------|----------------------|--------------------------|
| 【里山林保全】 | (H25)30人 (H26)実施中 | (H25)7回 (H26)実施中 | (H25)0.7ha (H26)1.0ha |
| 【侵入竹・竹林整備】 | (H25)246人 (H26)実施中 | (H25)65回 (H26)実施中 | (H25)1.8ha (H26)4.5ha |
| 【森林資源利用】 | (H25)4人 (H26)実施中 | (H25)4回 (H26)実施中 | (H25)0.2ha (H26)0.5ha |
| 【森林空間利用】 | (H25)0人 (H26)実施中 | (H25)0回 (H26)実施中 | — |



▲タケノコ収穫体験(タケノコを掘っている様子)

工夫した点・苦労した点・今後の課題

高齢者への地域貢献の場の提供と生きがいをづくりを支援

・過疎化が急速に進み、損なわれた竹林や里山の景観修復に向けて、高齢者に竹林、里山整備を通じた地域貢献の場を提供することにより、高齢者の生きがいをづくりを支援することができている。この結果、活動地域において竹林、里山の整備活動が、健康で長生きできるモデルとして注目されるに至った。



▲里山林保全のための草刈りが終了

整備した竹林の今後の管理により、継続的な活動を展開

・5年生以上の竹は、良質なタケノコを産出しないため、手入れした竹林は、3年をひとつの周期として、新しい竹に切り替え、森林資源を継続的に利用していく計画である。そのため、整備済の竹林であっても、毎年、新しい竹の生育を促すように古い竹を除去するなどの手入れをしていく必要がある。今後の活動継続に向けて、会の活動の理解者を増やし、会員を増加させていく必要がある。



▲パウダー状の竹チップ生産作業

<総括>成功を生んだポイント

創設メンバーの地域の衰退に対する危機感と地域活性化に向けた熱い思い

・元気な高齢者がいるにもかかわらず、過疎化によって、地域の活気がなくなってきたことに危機感を持った創設メンバーの、「地域を元気にしたい」との活性化に向けた熱い思いがポイントとなった。

竹林等の所有者、環境保全ボランティア団体等との協働で、事業継続できるしくみを構築

・竹チップ搬出機等の資機材導入と竹林等所有者及び作業ボランティアの協働により、荒廃した竹林や里山の整備が進み、良好な竹林・里山景観の保全や有害鳥獣被害の低減等多面的な効果を創出できた。また、新たに竹チップを活用した生ごみ処理を長野市内の環境保全ボランティア団体とともに取り組むなど事業効果に広がりが見られた。さらに、地域資源である淡竹の特産化に向け、淡竹所有者への情報提供や製造方法見直しについての助言を積極的に行うなど、本交付金終了後にも事業継続できる仕組みづくりが進展した。今後は、これら活動を基盤に西山地区の再生への取組強化が課題である。

⑩ 山仕事実践と体験イベントに地域内外からの多数の山仲間が集う

団体名： やまおか木の駅推進会議(岐阜県恵那市)

| | |
|---|-------------------------|
| ○ | 地域環境保全タイプ (里山林保全) |
| ○ | 地域環境保全タイプ (侵入竹・竹林整備) |
| ○ | 森林資源利用タイプ |
| ○ | 森林空間利用タイプ |



活動に取り組んだ経緯

木材の集材を起点に森林資源の地域内活用を促進する「やまおか木の駅」を母体に、本交付金の趣旨賛同者により会議を設立

- ・ 恵那市山岡町は、名産の寒天づくりに近年まで薪が盛んに利用されており、薪の取れる里山も地域内の至るところに残されている。
- ・ 里山の荒廃はこの地域でも進行しているため、里山林保全が求められているほか、イノシシやシカによる鳥獣害も深刻なため、耕地隣接林を伐採した緩衝帯づくりも求められている。
- ・ 本交付金の趣旨に賛同した個人、団体を中心に「やまおか木の駅推進会議」を結成し、平成25年から活動を開始した。
- ・ 「木の駅プロジェクト」とは、林地残材を集材場である「木の駅」に出荷して、資源の地域循環を図る仕組である。



▲恵那市山岡町花白温泉の「やまおか木の駅」

活動の内容

森を知り、山仕事を学んだ構成員の実践により、里山林、竹林の景観が再生(地域環境保全タイプ：侵入竹・竹林整備を含む)

- ・ 林況調査、活動計画策定後、林業技術研修、安全作業研修等を実施した。ここで学んだ選木、除間伐、作業道整備、木の集積等の技術により、安全に里山林及び竹林の整備を進めた。
- ・ 作業道整備、大径木・支障木の伐採などはプロ林業技術者と協働し、効率的に作業を進めた。

しいたけ原木や薪づくりへの活用(森林資源利用タイプ)

- ・ 伐採・搬出された木材をしいたけ原木や薪づくりに活用している。
- ・ 人工林の間伐で良材の成長を促進するとともに、スギノアカネトラカミキリ被害を予防し、木の駅に搬出するため間伐材を集積した。
- ・ 森林資源利用により生み出された伐採竹の有効利用を図るため、竹炭や竹チップを作った。

体験活動により参加者に整備意識を醸成(森林空間利用タイプ)

- ・ 子どもたちを対象に、里山林での自然体験やシイタケ植付け体験を実施したほか、森林の住民参加による整備や森林・山村の多面的機能を学ぶ研修会の開催により、参加者の里山整備意識を醸成した。



▲除間伐による里山林整備作業



▲間伐材の搬出作業(木の駅に出材される)

活動の成果・効果

地域内外の山仕事仲間が増加

- 山仕事体験や薪割りイベント開催などを通じて、地域住民と都市住民、Iターン者が協働することにより、たくさんの山仕事仲間ができた。

雑木林・竹林の整備とともに資源利用を実践

- イノシシやシカの鳥獣害に対応するため、耕作地に臨接する幅10m程度の獣害防止緩衝帯を作り、農作物被害の防止に寄与することができた。
- 雑木林整備により伐採された木材を集積、搬出することにより、材をキノコの原木や薪として利用することができ、森林資源利用を進めることができた。
- 伐採した侵入竹を活用して、竹炭や竹チップづくりを行った。作成した竹炭、竹チップは地域の公園施設に燃料として提供し、将来的な商品化を検討している。

選木・安全等の研修により山仕事の基礎を共有

- 山主や作業者に対して調査、選木、技術、安全研修を実施し、山の作業を安全に行うための基本事項を関係者で共有することができた。

| 活動タイプ | 延べ参加人数 | 活動回数 | 活動面積 |
|------------|-----------------------|----------------------|----------------------------|
| 【里山林保全】 | (H25)198人 (H26)実施中 | (H25)33回 (H26)実施中 | (H25)12.3ha (H26)12.3ha |
| 【侵入竹・竹林整備】 | (H25)38人 (H26)実施中 | (H25)6回 (H26)実施中 | (H25)1.1ha (H26)1.1ha |
| 【森林資源利用】 | (H25)180人 (H26)実施中 | (H25)30回 (H26)実施中 | (H25)12.5ha (H26)12.5ha |
| 【森林空間利用】 | (H25)114人 (H26)実施中 | (H25)6回 (H26)実施中 | — |



▲選木作業を実施中

工夫した点・苦労した点・今後の課題

技術講習の受講、安全装備、傷害保険加入等による安全確保

- 作業参加者は必ず傷害保険に加入するほか、安全講習を頻繁に開催し、参加者には1回以上の受講を義務付けた。さらに、刈払い機やチェーンソーなどを使用する場合は、ヘルメットをはじめとする安全装置着用を義務付けるなど、二重三重の対策を取って、作業の安全確保に努めた。



▲集積作業も安全教育が基本

継続的に地域内外の山仲間が集う仕組みを地域協働で構築

- 平成25年度から平成27年度までの3年間で、多様な主体が山仕事の基本を習得することを目指し、プログラムを実施している。1年目は林分ごとの調査や選木、施業方針づくりができることをはじめとして、3年間で、地域ぐるみで協働して作った施業方針に沿って、山主が積極的に山仕事に関わり、里山整備に取り組んでいくモデルである。平成28年度以降も、地域協働による里山整備と森林資源利用を進めるための核となる組織として、平成26年度中に本会議のNPO法人化を目指し、取り組んでいる。



▲作業道造り作業中

<総括> 成功を生んだポイント

「やまおか木の駅」により、森林資源活用と循環のしくみが構築済であった

- 平成25年2月に恵那市山岡町の花白（はなしろ）温泉に「やまおか木の駅」が創設された。木の駅に集まった原木は、天日乾燥を経て花白温泉の薪ボイラーの燃料になるほか、併設されている「花白薪の駅」で薪にして販売されるなど、木材を地域内で循環させ活用する仕組みが構築済であったことが、本交付金の事業を円滑に推進している要因である。

山仕事仲間を増やすための8つの重層的な取組が奏功

- ①森を知る、②山仕事を学ぶ、③山仕事を実践する、④プロとの協働、⑤仲間をつくる、⑥木を活かす、⑦地域をつくる、⑧環境教育、以上8つの重層的な取組により、安全な作業を学び、実践し、地域の里山を整備し、景観を守り、資源を活用することができている。さらに、これらを通じて地元住民から都市住民まで多様な主体が森林の多面的機能について、理解を深めている。